

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

明るさ、そして暗さ
(06年の始めに)

少年老易学成難 (シウネオヤスク ガクガク タシ)
一寸光陰不可軽 (イツシノウイン カンズベカス)
未醒池塘春草夢 (イダサマ フウシツウノユメ)
階前梧葉已秋声 (カゼソノゴヨ スベニシユウイ)

中学生の時、国語か何かの授業で教えて貰った漢詩。その軽やかでリズムミクな語調を幾度も繰り返す内にいつの間にかすっかり覚えていた。誰の作かは知らなかったが(調べたら南宋時代の朱熹という人の作品)、40年以上経た今でも淀みなく口から出て来る。この日本で最も知られている(と思われる)漢詩も、しかし、その意味を理解するには時間がかかった。正に「階前梧葉已秋声」の通り、人生も秋の声を聞く頃になって漸くその意味を知ることになる。

おそらく、そんなことを感じている方は少ないと思う。だが本当は、“そうした事実”を知ることができただけでも幸せなのかもしれない。

昨年11月、同級生が我が子を病魔で喪った。未だ22歳の学生だった。その悲しみにかける言葉も浮かばなかったが、おそらく冒頭の漢詩の意味を知る間もなかった青春只中の死だったに相違ない。その報に接した時、「人は何のために生き、そして死ぬのか」、愚かな問いかけとは知っていても、そう自問する自分がいた。そして、今から数十年前、会津八一が下宿に住む学生達に与えた学規を改めて思い出した。

- 一、深くこの生を愛すべし
- 一、省みて己を知るべし
- 一、学芸を以て性を養うべし
- 一、日々新面目あるべし

そうなのだ、老い易く学成り難い我々凡人もどのように死を迎えるのか分からない。とすれば、生かされている間は学規のような心の姿勢を失わないようにしたい。そう思った。

ともあれ、2006年が明けた。皆さん、それぞれに思いを抱き新年を迎えたことと思うが、経済的側面を見れば総じて「明るい新年」と云えそうだ。十数年、日本企業を覆っていた「3つの過剰」は不良債権処理の進展と共に漸く過剰を解消

し、上場企業を中心に過去最高益更新が続出、企業部門は資金余剰(投資抑制=債務削減)から資金不足(投資増強)に転じる傾向を見せている。失業率等雇用を巡る数値も改善し、家計の消費意欲も徐々に向上してきたようだ。

そうした事実に加え、株価大幅上昇、地価底打ち等を囃し、マスコミも一斉に「景気回復」「デフレ脱却」を報じている。が、そのはしゃぎ振りにどこか危険な匂いを感じないだろうか。

昨年の新年号で、私は「今年は大きく円安に振れ、日経平均は15,000円位迄上がる可能性がある」と云った。為替は思った程円安に振れず、金利上昇予測も外れたが、株価は概ねその通りになった。だから何だと云う訳ではないが、今年は市場関係者の多くが予想するような楽観的展開にはならないと見ている。

株価は既に十分すぎる程高い。今、「遅れてきた資金」や「逃げ腰の資金」で買いが買いを呼ぶ展開となっているが、危険水域での攻防戦はそう長くは続かない。景気回復、業績回復等は既に旧い材料(誰もが知っている材料)なのだ。そして今や、「上がって欲しい」という期待だけが相当程度膨らんでいる。

勿論、日本株価は03年4月(日経平均7,607円)で大底を打った可能性が高い。だから下がるにしても暴落はないと思うが、17,000円を付けた後、5~6,000円幅で下がるのではないか。その位は覚悟しておいた方がいい。

何が云いたいのか分からなくなってきたが、株式市場は私達が属する資本主義経済の羅針盤であると同時に人間心理を写す鏡でもある。だから常に見ておく必要があると思うのだ。ただこの新年、“景気回復”よりもっと衝撃的報道があった。

1月3日の朝日新聞は、「就学援助4年で4割増」を一面トップで伝えた。それによれば、東京と大阪で学用品や給食費等で公的援助を得ている児童・生徒が25%に達している。何だ、これは！ - 私は怒鳴りたい気持ちになった。勿論、25%の家庭に同情したからではなく、怒りを覚えたからである。昔貧しい時代でも、親たちは公的援助を受けるのを潔しとはしなかった。食うものを減らしてでも何とかした。「下層社会」等の言葉に甘え、公的支援に頼る親達が蔓延る社会に明るい未来等見ることは出来ない。

Weekly Fax Report

《複製・転載等はこちらへご連絡下さい》

URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/

2006.1.7(第493号)

TEL. 0438-53-6092 FAX. 0438-53-6096

Email: smc_toyo@hi-ho.ne.jp